
音の無い世界で

々々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音の無い世界で

【Nコード】

N8480C

【作者名】

々々

【あらすじ】

彼と彼女の物語。音の無い世界に生きる彼女と、音のある世界に生きる彼。何が聞こえますか？

ドアの開けると、中には無機的で潔癖を感じさせる真白な大して広くない空間が鎮座し、そこにはやはりいつもと変わらぬ金属光沢を放つ簡易ベッドと白い机、そして一人の少女が混じりあうことなくただ点々と存在していた。

少女は僕が部屋に入ってきたことにも気付かずに、ぼんやりとした明らかにここではないどこかを見つめた虚ろな視線を壁に固定していた。

僕は少女の後ろに立ち、ゆっくりと傷つけないように彼女の目を両手で覆う。

びくり

と、微かに肩が震え、ゆっくりとこちらを振り返る。表情はいつの間にか笑顔になっていたが、それが仮初めの物であることを僕は知っていて、彼女はそのことに気がついていないから余計に痛々しいでもそんな様子はおくびにも出さないで髪の毛を撫でてやりながらゆっくりと「お・は・よ」と口を動かす。

彼女も目を細めながら「お・は・よ」と返してくる。

部屋の中はただ呼吸音だけが響く静寂に包まれている。だが、それですら彼女を取り囲む世界に比べればずっと、音に満ち溢れた世界なのだろう。僕が髪を撫でる手を止めると、彼女は頭を二、三回振った後にベッドからするりと降り、

『遅い。四分も遅刻』

紙にペンで字を綴り、怒ったような顔を作りこちらに向けてくる。ただし、半分以上が笑顔で塗り固められていてはあまり効果はない

し、それ以前に、それらはすべて虚構であると僕は知っているから尚更意味を成していない。

『そんな事言ってるけど、髪、跳ねてるぞ』

そんな色んな事に気づいていないふりをして 現に彼女はまだ自分の笑顔が虚構であるとバレていることをまだ知らない 同じように紙に文字を書けば、彼女は慌てて髪を押さえ始める。

『ごめん。嘘』

あまりに真剣な顔で頭を押さえているのがなんとなく可哀想になりそう書くと、バツとこちらの顔を見た後に頬を膨らませ、髪を押さえるのをやめる。本当は嘘というのが嘘だったのだが、まあここで再度手のひらを返すのも彼女に悪い気がするのでその旨は伝えない。

『ごめんごめん』

左手で文字を書きながら右手で彼女の頬をつつく。口の中にためられた空気が気の抜ける音とともに抜け出し、跳ねた髪がぴょんぴょん揺れる。

『機嫌直してくださいよ、おじょう様』

ああ、“じょう”ってどんな字だったっけな。ふざけた感じでそう書けば、

『だからそのお嬢様ってのやめてって』

丸っこい字ですらすらと書かれる。よくそんな簡単に字が書けるも

のだといつもの如く感心する。

『それはそれは申し訳ございません』

『だからその言葉遣いもー』

『じゃあどうしろって言うんだよー！！』

『ええっ！！！ここで逆ギレ！！！』

ふと目が合つて、思わず笑う。ふりをする。彼女だって本心では笑つてないんだからおあいこだ。

ひとしきり笑いあつた後は、いつものように他愛も無い色々なことを筆談する。お互い慣れたもので、今ではもう普通に話すのと同じくらいの早さで会話が進んで行く。

話の内容は自然と、この部屋の外の世界の話になることがほとんどである。というのも、彼女は这个世界に生を受けてわずか十年で、ただしそれは彼女の半生以上の期間でもあるのだが、この部屋に入られ、それ以来一度も外に出たことも、それどころか外を見たこともない。

あくまで表向きは“治療”のためということになっており、彼女にもそう伝えられているが、実際はそんなものが嘘偽りであることは彼女も知っているのだらう。それでも彼女はその事を一度も話題に出すことすらなく、こうして毎日を白い部屋の中ですごしているのだ。

そして僕に与えられた役割 別に誰かに強要されているわけではないが が、彼女に外の世界を伝えることだ。でもそれももう長くは続かない、それどころか、もう終わってしまうことも、僕は知っていた。

それは、彼女の“治療”にあたつての副作用や体力の衰え、精神的

苦痛等が原因でもう先が長くないことや、僕に対する“治療”が最早最終段階に達しつつあり、来週には晴れて“退院”するということ事に基づくものもあるが、それだけではない。
そんな物より直接的で具体的に圧倒的な現実があるからだ。

先程から警報が鳴り止まないのだ。

無個性で無機質で機械的な女性のアナウンスと、響き渡る警告音。
断続的に薄い扉の向こうから漏れ聞こえる怒声と悲鳴と歓声と爆音。
逃げる逃げるな諦める戦えやめろ殺せ撃て逃げる逃げる逃げる！！！！

っっ。

『どしたの？』

袖を引かれる感触と、惚けた表情と、丸っこい文字。
まわりの音に気を取られて心ここにあらずだったらしい。

『なんでもないよ』

そう、なんでもないのだ。これは彼女の知る必要のない情報だ。僕が彼女に与えるのは、綺麗で暖かで優しくて丸くて嘘みたいにやわらかい、そんな世界のことだけでいいんだ。たとえそれが全部作られた、嘘と虚構に塗り固められた、そんな、世界でも。

『そうだ、今度この前言った猫、頑張って連れてきてみるよ』

『え？本当に？』

爆音と悲鳴。

『ああ。すっかり懐いてるからＴシャツの中に入れて連れてくれば
ばれないよ』

『うわあ……いいなあ……暖かそう』

『暖かいぞー。ぬくぬくのほくほくだぞー』

やめてください……！助けて助けて……！

『ぬくぬくでほくほく……。触りたい……！』

『おっし、任せてくださいな……！』

悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴、悲鳴。

『それじゃあ、指きりしよっ』

『おお、懐かしい。どれ、それじゃあ一つ……って、これ恥ずかしいな』

ひととき大きな爆発音。衝撃で扉がゆれる。

『へへへー。実は私も恥ずかしかったり』

『ま、そんなこと気にしてたってどうしようもないか。よっし、それじゃあ始めますか、せーのっ』

四度目の爆発音とともに、部屋の扉が破られる。

『ゆびきりげんまん』

立ち上る炎と、肩から銃器を下げた男達が部屋の前に並ぶ。幸いにも彼女は気付いていない。

『うそついたらはりせんぼんのーます』

銃口が一斉にこちらを向く。

ふと、結局彼女には何一つ本当の事を教えてあげられなかったなど、思考がかすめた。

でも、彼女に僕が何を伝えれたって言うんだ。こんな現実、廃れ荒んだ真実を伝えることなんて、できるはずがないだろ？

だからこれで良かったんだよね？たとえ嘘でも、彼女にきれいな世界を見せてやれたなら、それで。

彼女の顔を見ると、とても嬉しそうに、笑っているような気がした。それだけで、僕も満足だった。

純粹に、混じり気一つ無く僕も自然に笑い返すことができた。

二人で笑いあったあと、どちらともなく、声にならない言葉がこぼれ出て、

「せ・ー・のっ」

『ゆーびぎった』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8480c/>

音の無い世界で

2010年12月2日15時44分発行